島木赤彦に関する一資料

「局部的文学と民衆的文学とを論ず」について

宮川康雄

島木赤彦の代表的著述である『歌道小見』（大正十三年五月　岩波書店）に「万葉集の系統」と題する一文が収載されている。大正八年十月に慶応義塾図書館において行った講演の記録に同書の刊行の際、訂補を加えたものである。大正八年の時点における赤彦について知るには講演当時の記録によらなければならないが、それは、八年十月号の『信濃教育』及び九年一月号の『アララギ』（新年特別号）に掲載されたまま、赤彦全集には収録されていない。そこで、さきごろ『信濃教育』所載の記録にもとづいてこの講演の意義について考察を加え、「島木赤彦の「万葉集の系統」について―鍛錬道の成立―」と題する小論を稿し、『文芸研究』第百四十集（平成七年九月）に寄せた。

ところで赤彦は、右の講演を行ったと同時期に発行された『雄辯』の八年十月特別号に「局部的文学と民衆的文学とを論ず―和歌と民謡に就いて―」と題する文章を寄稿している。この文章も全集に収録されていないが、その理由は全集第七巻の「巻末記」に「本全集第三巻の「万葉集の系統」と殆ど相違ないので之を省略したことを附記して置く。」と記されている。両者の内容は重複するところが多いとはいうものの相違も存している。ここに紹介するのは「万葉集の系統」講演当時の記録が全集未収録であるのに加えて、この論文にも資料としての価値が見出されるからである。

論文は講演と叙述の順序を異にしているが、実感の「直接表現」と「間接表現」という表現方法の違いから隆達の小唄と弄斎節、万葉集と古今集、勅撰集と風俗歌、三味線唄とその他の民謡を区別し、これを「民衆的文学」と「局部的文学」という概念で総括し、文学としての価値の高下を論じていることでは共通している。そうした規準を近代短歌にも及ぼして与謝野鉄幹夫妻と正岡子規の文学の相違に説き及んでいることも同様である。すなわち明治維新後における和歌をめぐる動きについて、「精神なき形骸の破壊せられるのは容易なことである。明治の改新はあらゆる区別的局在を破壊して普遍的にし民衆的にした。左様な機運の至ると共に今迄の貴族的局在的和歌が打ち破られて、民衆的和歌が新しく現れて来るのは自然の趨勢である。」と肯定し、鉄幹夫妻が子規と並んで大きな役割を果たしたことを「古き和歌の形骸を破つて改新の声を挙げたものに落合直文の系統を引いた与謝野氏夫妻があり、一方に正岡子規がある。此両者の主張は全然相反してゐるけれども、明治時代和歌改新の道を拓いたことは同じである。」と述べている。そして「夫れは何れも在来の貴族的和歌を破壊して民衆的なものにしたといふことに於て意義を有し得てゐる。」と意義づけているのである。

しかしながら講演では、両者が立場を異にすることは述べているものの、その文学の価値如何については論じていない。これは鉄幹

と立会いの場で行った講演のためでもあろう。ところがこの論文では、子規の写生主義についての自身の解釈を前面に推し出し、「与謝野氏の歌は民衆的であつても夫は民衆の弱所を現してゐる。子規の歌は民衆の真剣な心を現してゐる。与謝野氏は挑発する。子規は鍛錬をする。」と子規の側に立って、積極的な姿勢を見せているのである。

さらに大きな相違は、講演の後半で力説していた「鍛錬道」についての記述が論文には欠けていることである。論文は「民衆的に改新せられてゐる短歌が今後如何にして民衆的に銑錬せられて、日本民族の究極的真剣な心を直接に表現するの道たらしめ得るかといふことが、現今短歌作者の間に考へらるべき、最も重要なる問題であらねばならぬ。」と刻下の課題とすべきことを提示することをもって締めくくられている。鍛錬道についての記述が見られないのは、論述を文学の範囲に限定したためであったろう。

「民衆的文学」についての赤彦の関心は、『アララギ』の大正三年十一月号及び四年一月号に掲載した「伊豆俚謡考」あたりから見出されるが、重視すべきであると強調するようになったのは、大正六年に『アララギ』『珊瑚礁』に掲載した「隆達の小唄」や「万葉集古今集小唄」などからである。これについては、第一次世界大戦中に西洋社会に出現したデモクラシーの思想が国内に輸入され、言論界に新潮流が生まれていたこととの関わりを考えなければならない。

とはいっても赤彦は、デモクラシー思想に全面的に共鳴したわけではない。「我国太古より万葉集に至るまでの歌は全然日本民族の歌謡である。我国は国初より氏族の制が現存して、貴賤上下の別が明かであつたとはいへ、貴賤上下の区別は相互の親睦を疎隔する障壁とはならなかつたのである。」とか、「短歌の民衆的になつてゐることはデモクラシーの流行よりもズッと以前に行はれてゐることである。」とかと記している赤彦における「民衆」が、階級史観にもとづくそれと同一の概念を持つものでありえなかったことは言うまでもない。「民衆」という言葉は当時にあっては多様な意味を内包する曖昧な言葉であった。

赤彦はしかしデモクラシー思想の潮流に洗われることによって、文学と民衆との関わりについて目を開かれ、思索を深めた。その思いはデモクラシー思想の昂揚期を迎えたこの時期になっていっそう強くなってきたように思われる。「切実なる現実相によつて動き止まざる民衆の力は常に不可抗力である。」のごとき強い調子の言説がそのことを表しているであろう。

この論文は、歌道理念であると共に生活原理ともした「鍛錬道」を説いた「万葉集の系統」の講演にわずかに先立つ時期に執筆されたものであり、この時点における赤彦の思索を反映するものとして注目すべき資料といえるのである。

論文の掲載された『雄辯』は、明治四十三年二月に野間清治によって創刊され、昭和十六年十月まで継続した大日本雄弁会発行の月刊雑誌である。寄稿の事情は明らかではないが、『日本近代文学大事典』（日本近代文学館編　昭和五二・一一　講談社）に「大正六年六月紙面を刷新、これまでの雄弁本位から総合雑誌への脱皮をはかり、九年一〇月「現代」の創刊によりもとの弁論雑誌にもどるまでの三年ほどは、それまで低調だった文芸欄も充実した。」とあることなどからして、文芸方面の充実に力を入れていた編集者からの求めに応じて寄稿したものであったろう。ルビの大部分は編集者が付したものである。明瞭な誤植もそのままに存して、〔原〕と注記した。

局部的文學と民衆的文學とを論ず

――和歌と民謡に就いて――

島木赤彦

ただ置いて、霜にうたせよ、科はな、夜ふけて來たが、憎いほどに

三味線小唄の鼻祖と言はるる隆達節の一つである。女が宵から待つてゐる所へ、男が夜ふけて來たのである。待ちあぐんで腹の立つのは女の心が眞實であるからである。内へは入れぬ。庭に置いて霜に打たせよといふのは可愛さの餘つた憎さの心である。可愛さと憎さの心が先きに立つてゐるから、劈頭に「只おいて霜に打たせよ」と出てゐるのである。此の唄の場合「只」には意義はないのである。只調子を強めるために自から置かれた副詞である。それに對して「霜に打たせよ」と言ふ。霜に逢はせよ、霜にふられよと言はずして「打たせよ」と言つたのは強調された亢奮の心が、自から斯樣な強い調子の詞を索めたのである。亢奮の心が強い詞となつて現れてゐるから各の詞が多く強い響きをもつた舌音を伴つてゐることに注意すべきである。斯樣な唄を予は實感の直接表現であるとするのである。直接であるから心と詞と共に引き緊つて作者の心が宛らに歌謡の上に生動するのである。比喩や洒灑や穿ちは弛緩した心から生るる詞の上の遊びであつて表現が多く間接である。考へて見ねば意義が分らないのである。分つてもそれは理屈や筋道の理解が出來るだけであつて、作者の實感を宛らに讀者に傳へることは出來ぬのである。實感から表現までに迂餘曲折の道程を取るからである。その迂餘曲折の道程を洒灑の技巧、穿ちの技巧、比喩の技巧等と名づけるのであつて、斯樣な技巧は歌謡の上の道草である。道草を食ふのは大もとの實感が遊び且つ弛るんでゐるのである。遊び且つ弛るんでゐる心から生れる藝術を墮落の藝術と名けるのである。

思ひよらずの、會釋のふりや、怨みの言ぞ、はたと忘れた。

同じく隆達節の小唄である。逢うたら怨み[原]の詞を盡さうと思つてゐるのは思ひ切られぬ未練があるからである。未練の心は弱い心である。ふと出逢うた時そつけない會釋をするだらうと思ひ設けた心は違つて、思ひよらずの打解けた會釋をされたのである。「怨みの言ぞはたと忘れた」の一句千鈞の重みを帶びて生動するのである。「はたと忘れた」の「はた」は此場合實感の動きを最も直接に表現し得た詞である。「はた」に對して、「忘れた」と結んだ音調の響きも作者主觀の調子にぴたりと合し得て居るのである。

隆達節の歌謡が悉く隆達の作であるか否かは予の分ち得ぬ所であるが（殊に雜誌「歌舞音曲」に掲載せられたといふ隆達小唄百首なるものは、珍しいものであるが、予には疑はしいものである）同一作家から出たものの多いと見えるのは隆達節小唄の特長がその多くの歌謡に一貫して現れてゐるからである。隆達節小唄の價値に就いては別に論ぜねば悉されぬのであるが、兎に角その表現の多く直接性を帶びてゐる點に於て彼の小唄は文學的作品としての生命を有し得るのである。

隆達（文祿―慶長）から直ぐ後に出た弄齋節の小唄になると之が全然反對の觀を呈してゐる。隆達節小唄の表現が直接なるに對して之は又極端に間接である。從つて前者の歌謡の生き〳〵した命を持つて居るに對して、後者は外形を整備せしめた人形である。内に發

する力が無くて、外に虚脱した形骸がある。虚脱した形骸を整へるために洒灑がある、比喩がある。穿ち、比喩、洒灑は倦怠した心から生れ出る欠呻よりも更らに間接なるに於て生ま溫るいのである。

よしや今宵は曇らばくもれ、とても涙で見る月を。
住めば浮世に思ひの増すに、月と入らばや山の端に。

前者自分の境遇を歎く心であらう。自分の境遇を歎く心ならば、直接に其の歎きを歌謠のうへに現すべきである。それを月が曇らば曇れなどと言つてゐるのが間接の表現になり、洒灑の表現になるのである。月の曇る曇らぬなどは、眞劍の心に對しては何うでもよいのである。何うでもよい餘所ごとに心が散歩してゐるから、詞が道草を食ふのである。後者も自分の身を儚む厭世感を歌つてゐるのであらう。「月と入らばや山の端に」は比喩であり、一種の洒灑である。世を厭うて身を損てるまでの儚ない心持を歌はうとする時、左樣な比喩や洒灑を言つて居られるのは餘程のんきな心の所有者である。少くも突き詰めた心の所有者ではないのである。月の山の端に入るのを西方淨土に向ふ心に喩ふるは古來よりの踏襲である。踏襲をそのまゝに用ひてゐる所にも作者の特殊性のないことが現れてゐる。特殊性の現るゝは眞劍の心に住する時である。弛るんだ心から生れるものは普汎性である。此二つの歌謠に特殊性の缺けてゐる所以は作者の心が弛るんでゐるためである。弛るんでゐるから間接の表現になり比喩的表現になり駄洒灑な表現になつて歌謠の特殊性を失うてゐるのである。

大凡弄齋節以下德川時代を通じて今日に至る三味線小唄の歌謠なるものは、その長唄なると端唄なると一節切なると大津繪なるとに論なく、悉く間接的表現に墮在するの現象を來したのは何の故であらうか。隆達節當時には猶本手組端手組裏組などの三味線小唄が存在して、その唱歌は隆達節と相併んで生き〳〵した作品を今日に遺してゐる。夫れが隆達節時代と弄齋節時代と極めて僅かな年所を劃して截然たる區別を示してゐるのは何故であるか。予想ふにその源因幾つもある。そのうち尤も重要なる源因は、三味線唄なるものが、民衆的に發達せなくて花柳社會といふ特殊な一區劃を中心として、その區域内に保存せられたためであると思はれるのである。

文學が民衆的に發達せずして或る區劃のうちに局限せらるゝ時、當初の生き〳〵した性命が失はれて萎縮せる外形のみが保存せらること當然である。切實なる現實相によつて動き止まざる民衆の力は常に絶大不可抗である。それに對して一區劃のうちに局限せらるるものゝ生活はその生活精神が民衆的生活精神と交渉の少ければ少ないほど弛緩した生活になるべきこと當然である。弛緩した生活から弛緩した心が生まれ、弛緩した心から弛緩した文學が生まれること是亦甚だ當然の順序である。啻に文學のみでない。政治は政治社會と言ふ一區劃を作つて其所に局在すべきでなく、宗教は宗教社會といふ一區劃に立て籠るべきでなく、教育は教育社會といふ一區劃に立て籠るべきでないこと文學の一區劃に局在すべからざると異らないのである三味線小唄の歌謠が隆達以後幾ばくをも經ずして外形的に墮在した事を如上の關係によつて說明せんとすること必しも無稽でないと信ずるのである。予はこの關係を更らに萬葉集の歌と古今集以後の歌とに推し及ぼして叙べて見る。

我國太古より萬葉集に至るまでの歌は全然日本民族の歌謠である。我國は國初より氏族の制が嚴存して、貴賤上下の別が明かであつたとはいへ、貴賤上下の區別は相互の親睦を疎隔する障壁とはな

らなかつたのである。雄略天皇は菜摘みの少女に平氣で戀歌を送つて居られる。その戀歌を萬葉集の編者は疑はずして開巻劈頭に掲げてゐる。持統天皇は語部の媼に、

否といへど語る志斐（媼の名）のが強いがたりこのごろ聽かずして朕戀ひにけり

という歌を賜つて居られる。それに對して媼は、

否といへど語れ〳〵と宣らせこそ志斐いは奏せ強いがたり

と宣る

と答へ奉つてゐる。我こそ否や〳〵と奏すれども、陛下が語れ〳〵と宣らすればこそ此の志斐は語り奏するのである。夫れを陛下が強い語りと宣らするのは聞えませぬと答へ奉つてゐるのである。我國ほど上下の區別の明かな國はなく、我國ほど上下の隔りのない國のないこと、此の一二の歌に依つても窺ひ知ることが出來るのである。天皇と人民と戀歌の贈答をなされてゐる一面に、人民は天皇を何處までも「現人神」と信じ奉つてゐる。萬葉集中「大王は神にし在せば云々」といふ歌は一二に止ゞまらない。此所が我が國柄の聊か他と異る所殊に米國人などの絶對に窺ひ知る可き限りでない所であつて、左樣な一國を一團とする民族生活から歌ひ出されたものが、太古より萬葉集に至る歌謠である。萬葉集の歌がすべて實感の直接表現であつて、力と勢と共に萬世に亙つて人を壓するに足る所以のものは、その源因一二にして止ゞまらないとは言へ、民族的の歌であるといふことが大なる條件を成してゐることは爭はれないのである。

萬葉集から百餘年を經た古今集に至ると、その觀ががらりと變つてしまふ。萬葉集から古今集に移れば實感の感受は殆ど喪失して目に立つものは外形の整頓である。實感の根ざしが薄いから其の表現が多く間接であり、遊戯である。古今集開巻劈頭の

年の内に春は來にけり一とせを去年とやいはむ今年とや言はむ

を讀んで誰か痛切なる實感の響きに共鳴し得るものがあるか。全體の心が遊戯から生まれ出てゐるからである。

音にのみ菊の白露よるはおきて晝は思ひにあへず消ぬべし

萬葉集の戀の歌の何れを持つて來てこの歌の前に置くとも此の歌は光を消してしまはねばならぬ。一首が菊の比喩である。菊も現れず戀も現れない。行るに詞の掛け合ひを以つてしてゐる。遊戯感以外に何物をも感受し得ざること當然である。凡そ斯の如き傾向は古今集以後すべての勅選集に通ずる所であつて、或ひは古今集新古今集の差違について說をなすものあるも、差とする所は五十歩と百歩であつて、通ずる所は實感の萎靡と表現の間接なるに在つて、文學的性命を持ち得ざるに於て同じである。（佐々木信綱氏が萬葉集にも長所あり古今集にも長所ありとなすは曖昧不徹底なる藝術觀を以つて歌に臨んでゐるためである）

萬葉集と古今集と百四十年を隔てて歌の命が全く變つてしまつたことは、隆達節の歌謠が僅かな年所を隔てて弄齋節以下とその命を異にすることと趣が似てゐる。弄齋節以下の墮落は三味線小唄が花柳社會を中心とした區域に局限されたことを大なる源因として數へた。古今集以下勅選集の命を喪つたことは其の源因を何に求むべきであるか。

萬葉集の歌の命ある源因の大なる一つは、萬葉集の歌が民族的の歌なるにある事を擧げた。夫に對して古今集の歌は殆どすべてが官人の歌である。官人の歌でなければ官人を中心として其所に集まり

得る一部種族のものの歌である。更に言へば和歌所と稱する官府へ集まり得る官人を中心とした一團の生んだ歌が古今集以下の勅選集である。猶更らに言へば藤原氏の享樂生活に調子を合せ得る官人の一集團が、藤原氏の保護を受けつゝ詠み集たものが古今集以下の勅選集である。卽ち萬葉集は民族的の歌であり、古今集は官府の歌である。その相違が兩者の性命に大なる影響を及ぼしてゐることを否定することは出來ぬのである。殊に當時の藤原氏は甚しく人民を無視し地方を無視し武人をまでも無視した。人民を無視しすべてのものを無視した藤原氏は自から自己の氏族を以つて一團を成くり、他の氏族との間に截然たる區域を劃して一國の政治を全くその區域の內に局在せしめた。政治己に局限的である。生活亦局限的である。その間に行はれた文學が局限的であること止むを得ぬ所である。殊に藤原氏の局限的政治は自己氏族の享樂的生活を支持するに足るの政治であつたため、その規模は小さくその政治的理想は極めて低調であつた。斯の如き區域の間に行はるる生活と、その生活から生るる文學の規模が小さく低調であることは自然の數である。枕草紙は機智の文學である。源氏物語は要する所享樂的な氣分文學であると予は信じてゐる。古今集以下勅選集が同じくこの範圍以上に出られぬのは、その源因職として局限的文學なるに依るのである。弄齋節以下の小唄は狹斜文學である。古今集以下の勅選集は貴族文學である。共に局部的文學なるに於て眞の生命の所有者たり得ざるを同じなりとする。

藤原氏が局限的政治を行ひ局限的文學を生むで居る間に、日本民族は之と全く別途なる生活をなし、切實なる現實に根ざしたる歌謠を成せること想像に難くないのであるが、官府を中心として發達した文學のみが多く傳へられてゐる我が國には、徵すべき文献の乏しきを遺憾とする。併し乍ら古今集の背後に當時の風俗歌がある。その風俗歌の或るものが古今集中に僅かに顏を出してゐる。

阿武隈に霧たちわたり明けぬとも君をばやらじ待てばすべなし

みさぶらひみ笠と申せ宮城野の木の下露は雨にまされり

の如きである。之等の歌を前掲「年の內に」「音にのみ」の歌と比較すれば當時民族の間に醞釀せられつゝありし歌謠のうちに如何なる珠玉を藏してあつたかを窺ひ知ることが出來るのである。民族の歌は單に勅選集の間に少しづつ顏を出してゐるのみでない。その他に猶神樂歌催馬樂の中にも多く採用せられてゐる。

笹分けば袖こそ破れめ利根川の石は踏むともいざ川原より。

きぬ川の、瀨々の小菅の、やはら手枕、やはらかに、寢る夜はなくて、親離くる夫

の如きである。雜曲と稱すべきもののうち

なほこそ、國のかたは、見やらるれ、わが父母、ありとし思へば（土佐日記）

よるは誰と寢む、常陸介と寢む、寢たる肌もよし（枕艸紙）

と如きがある。何れも萬葉集若くは上古民謠の系統を引いた、直接表現の歌謠である。降つて足利時代に至つて

宇治のさらしに、島に洲崎に、立つ波をつけて、濱千鳥の、友呼ぶこゑ、ちりちりやちり〳〵、ちり〳〵やちり〳〵と、友よぶところに、島かげよりも、櫓の音が、からりころり、からりころりと漕ぎ出だいて、釣する所に、釣つた所が、はあ面白いとのう。

あの山見さい、この山見さい、いただきつれた大原木。

の如き小歌がある。隆達節の小唄、本手組端手組裏組等の組唄もこれらに系統を引いたのは紛れなき所であるが、それらの組唄が弄齋節以後に及んで局限的に保存せらるゝの姿となつてから生命のない形骸を成すに止ゞまつたのは已むを得ぬ次第である。併乍ら三味線小唄こそ斯の如き頽敗を來したと言へ、民族の歌謠は地方的に廣汎に發達して、盆踊歌、田植歌、麥搗歌、舟歌、馬士唄等の上に生き〳〵した發達の跡を遺してゐる。現今伊豆南陬に遺れる民謠のうち

この苗を、おしあげて、どこに住まずや、いなごや、きりすすき、すきよしの、こや（かや？）のうらに、すまずや（稲生澤村）

の如きは、多少文句に訛りの變化はあらんも、少くも平安朝時代の民謠を今に傳へてゐるのではないかと思はれるものさへある。吾々は斯樣な遺物の斷片を採拾して日本民族の成した歌謠の經路を窺はんとするのである。今悉く之を稿するに及ばない。

或は舟唄の舟夫社會に歌はれ、馬士唄の馬士社會に歌はるるを以つて、同じく局部的歌謠でないかと言ふものあらんも、是等民謠はその根本の心が民衆生活の眞劍な心に通ずるに於て種類として分つべからざるものである。花柳社會を中心として發達せるものは同じく民衆を相手とするも、それが多く民衆の遊びの心に迎合し、若くは左樣な心を挑發するを目的として發達せるに於て、眞劍の文學となり得ないのである。左樣な社會にも痛切なる生活がある。その生活が直接に叫ばるるやうな歌謠であれば、文學としての力を有し得ること勿論であるが、德川時代三百年に亙つて三味線小唄から左樣な眞劍な歌謠を遺されてゐないのは、花柳社會なるものが、遊びの心を盛る特殊の區域であるからである。同じ意味に於いて、馬士唄舟唄その他の民謠にも遊びの心の盛らるるに止どまるものがある。左樣な歌謠は同じ意味で文學としての價値を認め得ないのである。これは大正時代の今日、民衆的に唱へらるる聲の中にも、夫れが寧ろ民衆の弱所を現すに足るやうな低調な要求に迎合し、若くは左樣な要求を挑發せんとする聲の多く交じると同じである。斯樣な聲は如何に民衆に歡ばるる聲であつても、夫れは嚴肅なる民衆心を現したものでないのである。之れは餘談であるが、予の所謂民衆的なる詞に對して要求する究極的意味を言ひ現すに恰適であるから、引例として言ふのである。

一方に貴族文學であつた古今集以來の歌風は一部社會に限局的に保存せられて、一千年後の明治に及んだ。一千年後に及んだけれども、夫れは發達したのではなくて保存せられたのである。只その間に平民的政治期の氣運を代表するものに源實朝の歌が現れ、德川時代積弊打破の氣運に胚胎せられたと思はれるものに僧良寛、田安宗武、平賀元義等の歌が現れた。これは一千年間にあつて殆ど異數である。その他のものにあつては只保存せられたる遺物である。精神は千年の昔に失はれてゐる。その形骸が明治時代まで續いたのは、國民性によりて早くより選擇せられた形式文學の餘德である。

精神なき形骸の破壞せられるのは容易な事である。明治の改新はあらゆる區別的局在を破壞して普遍的にし民衆的にした。左樣な氣運の至ると共に今迄の貴族的局在和歌が打ち破られて、民衆的和歌が新しく現れ來るのは自然の趨勢である。古き和歌の形骸を破つて改新の聲を擧げたものに落合直文の系統を引いた與謝野氏夫妻があり、一方に正岡子規がある。此兩者の主張は全然相反してゐるけれ

ども、明治時代和歌改新の道を拓いたことは同じである。さうして夫れは何れも在來の貴族的和歌を破壞して民衆的なものにしたいといふことに於て意義を有し得てゐる。子規の改新は古今集以來一千年の形骸を破つて直に萬葉集の性命に返ることであつた。それゆゑ、彼の歌は悉く實感の直接表現を目指した。與謝野氏は泰西文學の浪曼的部面から多く影響を蒙つた。その表現には多く比喩が用ゐられてゐる。子規の寫生を重んじたのは實感を重んじたのに因由する。與謝野氏の表現の比喩的であり抽象的であるのは氏が多く浪曼的想像の世界に住んだからである。予は已に實感の直接表現を以て隆達節と弄齋節との價値を分ち、萬葉集と古今集との價値を分ち、勅選集と風俗歌との價値を分ち、三味線小唄と他の民謠との價値を分たんとするがゆゑに、更に之を推し進めて子規の歌と與謝野氏夫妻の歌との價値を分たんとするは自然の順序である。與謝野氏の歌は民衆的であつても夫れは民衆の弱所を現してゐる。子規の歌は民衆の眞劍な心を現してゐる。與謝野氏夫妻は挑發する。子規は鍛錬をする。兩者爲す所を見ればこの岐れ目甚だ分明である。龍の口で元の使者を斬るために振り上げられた劍は時宗の意志の直接表現である。左樣に緊張せられたる意志が民衆的意志となつて直接表現を敢へてしたのが明治維新の大業である。民衆の心の弛緩した時間接表現の道を取る。今日社會の弊とする所は、同じく民衆的の聲であつても、夫れが直接表現の道を避けて利害のために、若くは享樂のために、間接表現の道を取らうとする所にある。直接表現なる語は單に和歌歌謠の價値を分つに足るの標語でないと予は信じてゐるから、再び餘談に亙るのである。

予は與謝野氏夫妻の歌を眞劍なる民衆心を現したものであるとする事に躊躇する。併乍ら千年來傳はり來れる貴族的和歌に對して、與謝野氏夫妻の歌と子規の歌とが、改新の聲を揚げたものとすることに異議がない。近頃デモクラシーの思想が唱へらるるに乘じて、民衆的短歌を起せと呼ぶものがある。短歌の民衆的になつてゐることはデモクラシーの流行よりもズッと以前に行はれてゐることである。只此の民衆的に改新せられてゐる短歌が今後如何にして民衆的に銑錬せられて、日本民族の究極的眞劍な心を直接に表現するの道たらしめ得るかといふことが、現今短歌作者の間に考へらるべき、最も重要なる問題であらねばならぬ筈である。（大正三、四、六年「アラ、ギ」所載愚考參照）